

## 2) モモアカアブラムシに対する数種薬剤の殺虫効果

### (1) 材料および方法

#### ①供試虫

2013年に県内の園芸作物から採集したモモアカアブラムシ4個体群を、20℃16L8D条件下でポット植えにしたキャベツ（品種：おきな）を用いて増殖してから供試した（鹿沼市いちご系統，佐野市かきな系統，上三川町トマト系統，鹿沼市トマト系統）。

#### ②供試薬剤

試験にはアブラムシ類またはワタアブラムシで各種作物に登録のある12薬剤を用い、濃度は図1中に記載した。また、展着剤として採集濃度20,000倍となるようにマイリノーを添加した。

#### ③試験方法（虫体浸漬法）

9cmシャーレ中に流し入れた1%アガロースゲル上に、直径3cmに切ったキャベツ葉片を葉裏が上になるようにゲルと密着させて置き、リーフディスクを作成した。一方にゴースを張ったアクリル円筒（内径45mm、高さ40mm）に10～15頭の無翅雌成虫を入れ、薬液中で10秒程度揺らしながら浸漬し、ペーパータオル上で余分な水気を除去してから、リーフディスクに接種した。リーフディスクは、接種後は葉がシャーレの上側となるよう、直接光の当たらない20℃条件で静置し、48時間後に生死を確認した。苦悶虫や、リーフディスクから落下し歩行に異常がみられる個体は死亡と見なした。試験は3回行い、結果の平均値から、Abbott(1925)の補正式を用いて補正死虫率を求めた。

### (2) 結果

- ・イミダクロプリド、トルフェンピラドの効果は何れの個体群でも高かった。
- ・アセタミプリド、チアクロプリドの効果は3個体群で高く、1個体群でやや高かった。
- ・シペルメトリン、ペルメトリン、マラソン、テブフェンピラドは、効果の高い個体群もみられたが、個体群間でばらついた。
- ・ジノテフラン、MEPは効果のやや高い個体群もみられたが、個体群間でばらついた。
- ・メソミル、カルタップでは何れの個体群に対しても十分な効果が認められなかった。

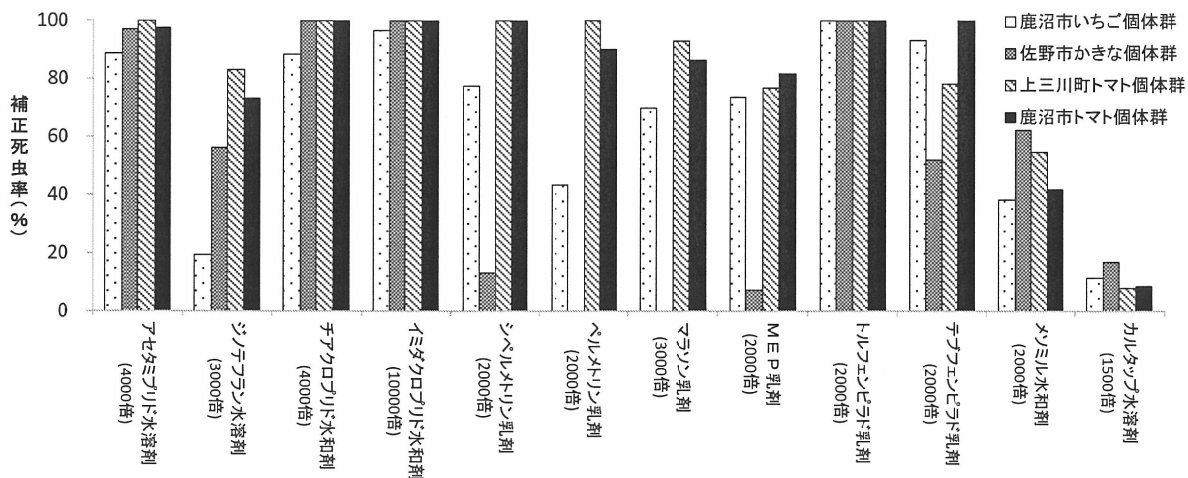


図1 各種殺虫剤によるモモアカアブラムシ4個体群に対する殺虫効果